



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

| | |
|------------|---|
| Title | 本書との対話の試み 曽我幸代著 『社会変容をめざすESD : ケアを通じた自己変容をもとに』 (fulltext) |
| Author(s) | 成田,喜一郎 |
| Citation | ホリスティック教育/ケア研究(22): 104-106 |
| Issue Date | 2019-03-20 |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/159193 |
| Publisher | 日本ホリスティック教育/ケア学会 |
| Rights | |

本書との対話の試み 曾我幸代著

『社会変容をめざすESD： ケアを通じた自己変容をもとに』

(学文社、2018年)

成田 喜一郎 自由学園

NARITA Kiichiro

わたくしは、ここで本書の批評や紹介をするつもりはない。

あえて「本書との対話」を試みたいと思った。

著者・曾我幸代(2018)『社会変容をめざすESD：ケアを通じた自己変容をもとに』(学文社刊)の書名の通り、本書と対話することで、ESDの文脈で「ケア」の意味を探り、自らの内にも何らかの主体変容transformationが起こる予感がしたからである。

本書との対話

本書の目的は、「教育が個人ならびに社会のウェル・ビーイングを高めることに貢献するかという問いへの一つの応答として、個人と教育、および社会の関係性に着目しながら、持続可能な社会の形成に求められる教育について検討すること」(p.1)とある。

わたくしは、その問いへの応答と検討過程について、深い共感や示唆を受けた。

以下、わたくしが共感や示唆を受けた箇所(抄録)を挙げてみたい。

- ・持続可能性を考える上で、二元論的な世界観の問い直し、全体論的(holistic)な世界観に基づいた思考をすること。(p.211)
- ・メジローやセンゲ、シャーマーを援用しながら、教育とは、個人と社会をつなぎ、切

り離された関係を捉え直し、社会変容につながる「文化的な行為」であるとしたこと。(p.212)

- ・自由学園最高学部生の調査を通じ、「生活即教育」のもと関係性を取り戻す暗黙的な実践を行い、他者との違いの認識、その「差異の中の同一性」(メイヤロフ)を捉え、「わたし」から「わたしたち」というより高い当事者性に向かうケアの重要性を抽出したこと。(p.214)
- ・「コミュニティを基盤とした意思決定や社会的寛容、環境管理、適切な労働力、生活の質の向上に求められる市民性」(p.67)を担保する「シュチュワードシップ」(地球の番人)概念の重要性、そして、ケアが「他者との関わり方を意味する手段にとどまらず、『自分自身と社会を変容させるための学び』」にとっての重要な概念的枠組みであり、「ESDのエッセンス」と捉えたこと。ケアは、「ESD」のD、すなわちDevelopmentの意味を問い直す。開発か発展かという社会のあり方だけではなく、人間的な「発達」をも意味すること。(p.217)
- ・「生徒・学生の個々人の状況と地球規模で起きている諸問題との同根性を捉え、『生きづらさ』に向き合う教育活動が展開され

るとき、変容をもたらす深い学びへと進化すると予察していること。(p.218)

- ・人間存在を問いながら、深めていく再帰的なプロセスを教育の中に組み込むためには、ケアの精神に根ざした学校文化を築いていく」ことの必要性を述べていること。(p.219)
- ・「教育という営みにある『当たり前』を問うことで見出される新たな価値に基づき、創造していくプロセスが、教育の〈持続可能な開発〉であり、社会変容とつながる」こと。(p.219)
- ・「持続可能な社会づくりに貢献できる価値観をもった人間を育てることに目的が置かれて、一人ひとりが「生」を全うできるようにケアされた学習環境を提供する必要があることを意味している。ESDは、多様な価値に出会わせ、切り離された知識体系と既存のものとを再編成させてゆく機会を提供している（中略）。そのとき、深く、問いかけ、考えることが重要となる。そうすることで、出会えない他者や自然の『傷つきやすさ』に向き合うことができる。さらに自己対話をしながら、切り離された他者や自然とともにいるコミュニティのあり方を問うのである。一人ひとりが立ち止まって自分自身のあり方を問い直し、一人一人がケアされるコミュニティをつくっていくことで、（中略）持続可能な未来の創造ないし、積極的な社会変容は具現化していく」と予察する。(p.220)

本書の目的にあった問いに対する曾我の応答は、著者自身の学習経験・教育研究と自由学園というフィールドの調査研究から導き出された結論である。

わたくしが、2010年から所沢市立教育センター「ESD調査研究協議会」において、市内の先生方とともに「ESDとは何か」という問いを

抱えつつ、小・中学校におけるESD単元展開のデザインとその実践を重ねてきた結果として到達した3つの視点がある。

それは、「つながりへの気づき(holistic approach)」と「永続的な問い(essential questions)」と「深いふりかえり(reflection & contemplation)」である。¹

本書との対話を通して、これら3つの視点がESDの実践研究における有意性を担保されたように思われる。また、所沢市の実践で視野に入りにくかった「ケアされるコミュニティづくり」という視点に気づいた。「ESD調査研究協議会」は、この8年間で学び究めのコミュニティとなったが、学校や地域のコミュニティ形成までは至らず、ケアへの視点は十分とは言えなかった。その限界性を超えるために本書からの示唆は重要だろう。

本書において残された課題は、①さらに「変化の担い手」である若者が自己変容のみならず、社会変容との統合的なプロセスを明らかにすること、②教師をはじめとする大人たちの「学びなおしの場」としての高等教育機関を生涯学習の拠点としていくこと、③国際的な流れの中でESDの必要性を強調する外発性ではなく、学校・地域におけるESDの内発的発展論の検討がなされることだという。

今年の4月から関わり始めた自由学園における教育研究や、公立学校・地域におけるESDの実践研究への協働支援を行うわたくし自身が、視点の拡張・深化を促された。

その意味で今後本書の著者との「学び合う／究め合う」機会を持てればという思いに駆られる。

著者の書きぶりや本書スタイルへの注目

本書は、曾我幸代の博士論文をもとに編まれているが、博士論文においても本書においても一貫して「はじめに」や「おわりに」に登場するのが、1992年当時、12歳だったセヴァン・カ

リス・スズキの問いかけである。学術研究書においては、一般的な作法として先行する文献研究を中心にリサーチクエストを設定し、検証を行ってゆくのが常である。曾我のESD研究においては、その前提として大人たちに比べ限りなく未来を「多く」有する存在である乳幼児・子どもたちや若者にフォーカスを当てるところから出発している点に注目しておきたい。

また、注目したいのは「索引」の存在である。近年の著作物に索引のないものが多々流布しているが、本書には、36の概念が索引の中にある。索引は、著者が思索・探求し、本書を書き進めてゆく上で不可欠な36概念²であり、また、読者にとってはそれらの概念がいかなる文脈で扱われているかを知る上で極めて有効な機会を提供している。

さらに、わたくしが注目したいのは、書籍の「装丁」という文化についてである。本書の表紙の色彩は極めて暗い。最近出版が相次ぐSDGs関連の書籍のカラフルな表紙に比べ目立たず、ひっそりと書架や卓上に置かれている。しかし、ケアを通した自己変容をもとに社会変容につながるESDへの航路は決して明るくはないし、闇に包まれた世界であると言っても過言ではない。そうした意味でもESDのゆく航路のリアリティをイメージさせる表紙では

ないだろうか。しかし、暗雲の立ち込める航路だったとしても、「それでも人生にイエスと言う」べき一条の光がこの表紙には存在する。また、本書の裏表紙の白無地やカバーを外すと立ち現れる白地のノートを思われる装丁は、印なき道をデザインするためのノートをイメージさせる。

さあ、若きこの研究者とともに、持続可能な未来を探り描き続けて行きたい。

【注】

1 所沢市立教育センター『ESDのすゝめ：所沢市版ESD実践の手引き』（平成30年3月）

<http://www.tokorozawa-stm.ed.jp/center/kenkyuu/H29%20ESD.pdf>

2 36概念

「IIS」「生きづらさ」「ESD」「ESDレンズ」「学習する組織」「学習の4本柱」「環境教育」「傷つきやすさ」「既存の教育プログラムの再方向付け」「教育振興基本計画」「ケア (care)」「形容詞付きの教育」「再帰的」「再生産」「システム思考」「持続可能な開発」「自治」「自分自身と社会を変容させるための学び」「自由学園」「スチュワードシップ」「生活即教育」「『成長の限界』」「バックキャストイング」「羽仁もと子」「フォアキャストイング」「不確実性」「変容」「変容的学習」「ホールインスティテューション・アプローチ」「ホールスクール・アプローチ」「UNDESD」「ユネスコ」「ユネスコスクール」「Uプロセス」「U理論」「レバレッジ」